開校４年目ジャカルタ日本人学校チカラン校の学校経営

前ジャカルタ日本人学校チカラン校校長
宮城県仙台市立長町小学校校長　茂泉　和浩

キーワード：特色ある学校づくり、国際理解教育、環境整備、バイリンガル教育

赴任校の概要（2023 年 3 月現在）
学校名　ジャカルタ日本人学校チカラン校
URL:https://cjs.or.id
児童生徒数　小学部 87 人　中学部 19 人
（2022 年 4 月 19 日現在）

1.　はじめに

ジャカルタ日本人学校チカラン校（通称チカラン日本人学校）は平成 31 年（2019 年）に開校した。チカランに多くの日本企業が進出したのに伴い、チカラン地区に学校が欲しいという要望が高まり開校するに至った。それまではチカランから 70 km離れたジャカルタ日本人学校に通学しており、学校開校はチカラン地区に住む日本人にとって悲願であった。開校 1 年目は 60 名ほどの児童生徒数で順調に伸びていくことが予想されていたが、開校 2 年目にはコロナウィルスの感染拡大による日本帰国者が増加し、私が赴任した開校 3 年目（2021 年 4 月）は、全校児童生徒数 28 名からのスタートになった。開校 5 年目を迎える今年（2023 年 4 月）、児童生徒数は 168 名へと増加し今後も緩やかに伸びていくことが予想されている。

ここでは感染拡大時の学校経営についてとウィズコロナになってからの学校経営について記すこととする。特にウィズコロナになってからについては、開校当時の管理職が構想を持ちながらもコロナ感染拡大によって十分には果たせなかった想いも念頭に置き、感謝の気持ちも込めて記したい。

2.　令和 3 年度、コロナ禍での学校運営

⑴　オンライン授業と分散登校

令和 3 年（2021 年 4 月）、私が着任した時はコロナ感染が拡大し続けており、授業は①オンライン授業、②ハイブリッド授業、③分散登校のどれにするかを教務会で決定し実施した。可能な限り「学びを止めない」という共通認識のもと、休校は極力行わないようにした。教室での感染拡大が危惧される際にはクラスまたは学部をオンライン授業にした。感染収束期には、出席停止で登校はできないが家で学習することはできる児童生徒のため、ハイブリッド授業を提供した。分散型登校は、小学部と中学部が登校して学習する日を交代で設け、家庭にいる日にはオンライン授業を行った。小学部と中学部は教室が離れているため、どちらか一方で感染が拡大した場合に分散登校にした。

教師が感染した際には、症状が治まり授業ができるというときには自宅からオンラインで授業を行った。学級によっては登校している児童へ担任が自宅からオンラインで授業を行い、その様子を教室で教務や空き時間の先生が見守るということも行っていた。

前述の様々な方法は、パソコンを全員に 1 人 1 台貸与しているために可能だった部分も大きい。ハイブリッド授業やオンライン授業での取り組みは、教師の ICT を使用した授業スキルを大いに高めることにつながった一方で、ハイブリッド授業の準備は教師の負担が大きく課題でもあったため、令和 3 年 10 月以降は、家族が

感染して出席停止になった場合や児童生徒が感染したものの症状が軽い場合は、授業の様子をオンライン視聴することを認めハイブリッド授業は行わないこととし保護者から理解を求めた。

⑵ 学校行事について

① 入学式、卒業式

小学部３名、中学部２名の５名を迎え、対面式で入学式を行った。他校ではハイブリッドでの開催も多く聞かれたが、入学者数が少なく十分な間隔がとれることから体育館で行った。同じように卒業式も体育館で行うことができた。

② 運動会

７月実施予定の運動会だったが、児童の一時帰国や、感染拡大が心配されたこともあり 10 月中旬に延期し、体育館で行った。全校でインドネシア体操や学年での表現が中心で、保護者には体育館２階ギャラリーからの観覧をお願いした。

③ 修学旅行

感染拡大の心配や、飛行機の利用ができないこともあり中止をする動きもあったが、チカラン日本人学校では、そのような状況下でも実施可能な修学旅行先はないかを調べ実施することができた。小学部５・６年生はジャカルタ近郊へ、中学部１・２年生はウォノソボへバスで行くことにした。感染状況の日々の把握やバス移動の可否、見学先の受け入れなどを確認しながら実施した。

3. 令和４年度の学校経営 ―特色ある学校づくり―

初代校長は、「支えあい、学びあい、磨きあい」という「3 つのあい」の大切さを重んじ学校経営を行っていた。「自立と共生の力を身に付け 日本と世界の未来を拓く 心豊かでたくましい子どもの育成」という学校教育目標にあるように、人と関わり合いながら自分を磨いていくことが大切であり、それが自立へとつながっていく。そして人と関わり合いながら問題を解決していく力が日本と世界の未来を拓くことにつながっていくという初代校長の考えを受け継ぎ、コロナ感染拡大で実施できないでいた取り組みを実現するべく活動した令和４年度であった。

⑴ 自立と共生の力を身に付けるために

・人との関わり合いを大切にした活動 ―縦割り集団による活動―

縦割り班を編制し、歩き遠足を実施したり児童朝会でゲームをしたりする活動を実施した。また運動会では縦割り班による種目も取り入れることで、班のメンバーと仲間意識が芽生えてきた。令和３年度まではコロナ禍で人と関わる経験が少なかったため、意図的に関わる機会をつくることで人との関わり方を学ぶ機会になった。その他にも、小学５年生以上による部活動も実施している。同じ活動に異学年集団で取り組むことにより、体力の増進とともに、人との関わり方や折り合いの付け方を身に付けてほしいと願い実施してきた。

⑵ 日本と世界の未来を拓くために

① インドネシア語・インドネシア文化の理解

・小学校１年生から中学校３年生まで、週に１時間インドネシア語を学んでいる。学んだインドネシア語をアウトプットする場として、栽培活動があげられる。野菜の栽培時にインドネシア人スタッフに積極的に関わってもらうことにより、インドネシア語を積極的に使いながら会話をする姿が見られた。

生活科 ウビ栽培

また、運動会では全校でインドネシア体操を踊ったり、家庭科ではインドネシア語を使ってインドネシア料理を作ったり、技術科や生活科ではシンコンやウビの栽培を行ったりすることで、食文化や気候、土の性質等についてなど、幅広い

理解につながった。

その他、「総合的な学習の時間」でのアンクルン（竹の打楽器）演奏体験、修学旅行先での現地校交流も行うなど、様々なアプローチの仕方でインドネシア語、インドネシア文化の理解に努めてきた。

② 外国語（英語）理解

・英語学習への様々なアプローチ

小学校１年生から中学校３年生まで英語の授業を行っている。担任と学校採用の英語教師で授業を行っている。インドネシアでは英語が通じにくいため、習得した英語を使用する機会が少ないことが課題として出されていた。そこで、英語学習の発表の場として全校が歌や劇、スピーチ等を行う「イングリッシュデイ」を実施してきた。また、バイリンガル教育として体育や音楽等の学習の一部において英語でのミックスレッスンを実施することでアウトプットの機会を増やしている。

・ 校内での英語検定の実施

自分の英語力を把握し次の学習意欲につなげるため、年に数回校内で英語検定を行っている。回を増すごとに受検者が増加しており、教員の受検者も増えてきている。

③ 自国理解

・ 日本文化理解

在校生の中には日本での生活が全くない児童もいる。そういった子どもたちにも日本の文化を体験させたいと思い様々な文化体験を実施している。

新年に全校で行う行事として「書き初め」がある。体育館に全校が集まり、墨で思い思いの字を書いている。また、小学部では学年ごとに「凧あげ」も実施している。運動会では、小学校３・４年生は「エイサー」を、小学校５・６年と中学生は「南中ソーラン」に取り組ませている。その他、CJS フェスティバルでは、小学６年生～中学３年生まで全員で和太鼓演奏も行っている。日本独特のリズムなので、インドネシアでの生活しか経験のない児童生徒にとって難易度は高いが、練習によって夢中になっていく姿も見られた。

日本文化とは言えないかもしれないが、学校の校庭の土を使って縄文土器づくりと野焼きに取り組ませた。これは小学部６年生の卒業制作として、粘土作りから行った。土器作りから乾燥、野焼きまで数か月がかりの学習になるが、チカラン日本人学校ならではの実践となった。

校庭の土で作った土器

(3) その他の特色ある学校づくり

① 国際教室の設置

国際家庭の増加に伴い、日本語が分からないことで学習内容が良く理解できない児童生徒がいる。そういった児童生徒に対応するために国際教室を設置した。日本で指導経験のある教員を学校で採用し、放課後の時間を利用して指導してきた。日常的な会話については継続的な指導である程度理解できるようになるものの、小学校高学年以上になると、文章問題の理解ができないために分かっていても回答できないということが見受けられた。高校受験をする生徒もいるため、今後も大きな課題になる。

② CJS（チカラン日本人学校）タイム

児童生徒の苦手教科の克服、得意分野のさらなる伸長のため、週に２回放課後の時間を使って学習する時間を設定した。チカラン日本人学校の周辺に学習塾は数か所あり、そこに通っている児童生徒ももちろんいるが、児童数が少ない今だからこそ一人ひとりの学習ペースにあった指導が効果的ではないかという想いからス

タートした。時間は45分程度であるが継続的に行われている。

4. その他

(1) 特別支援学級相当の児童生徒の受け入れについて

チカラン日本人学校では特別支援学級は設置されていない。それは、児童数がまだ少ないために学校の経営上、なかなか設置できないという理由がある。もちろん学校に入学したいという保護者の要望は強く、運営委員会のメンバーになっている企業の方へもお断りしている状況である。人手が少ない中で預かるということは児童生徒の成長を考えると決してプラスには働かない。しかし、入学を断ることは家族が日本とインドネシアに別れて生活することを意味し、児童生徒の教育面だけで判断することは正しいとは言い切れない面も残されている。特別支援学級設置については、チカラン日本人学校だけではなく、他の日本人学校においても大きな課題となっており、文部科学省から別枠で特別支援教諭の派遣をいただくなど対策が必要ではないかと考える。

(2) 選ばれる在外教育施設に認定

チカラン日本人学校は、ICT教育や国際理解教育（現地校交流やSDGｓへの取り組み、バイリンガル教育の推進等）といった学校の特色づくりが認められ、令和4年度「選ばれる在外教育施設」に文部科学省より認定された。これからチカラン日本人学校が今まで以上にインドネシアで生活する日本人にとって魅力ある学校になるような教育活動が展開されることを願っている。

(3) 日本人学校の管理職として派遣されるということ

私が日本人学校に派遣されたのは今回が初めてで、日本での現職の校長として経験はあったものの勝手が違うために多くの不安を抱えてインドネシアに向かったのを覚えている。学校の仕事での大きな違いは教育委員会がないために最終的には自分で判断しなければならないことである。特にコロナ対応は日本とインドネシアでは国の施策も違う面があったため、大使館や職員と相談しながらもその都度判断を迫られたのは日本では経験してこなかった部分である。

しかし、その他の面を考えれば、「～をする」と決断をすれば2・3か月で実行に移すことができる良さもあった。それをすることができる力量と情熱のある教員集団、それを支える現地の職員が揃っていた。

これからも海外で生活する児童生徒のため、前へ前へ進んで行くチカラン日本人学校であってほしい。